



TITLE:

<批評・紹介>戦争地理學研究 小
川琢治著

AUTHOR(S):

北山, 康夫

CITATION:

北山, 康夫. <批評・紹介>戦争地理學研究 小川琢治著. 東洋史研究
1939, 5(1): 69-71

ISSUE DATE:

1939-10-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145660>

RIGHT:

批評・紹介

戦争地理學研究

小川琢治 著

昭和十四年七月十五日古今書院發行
菊判二六六頁

或は自然地理學の研究に、或は人文地理學の研究に、學は東西を兼ね、老いて益々盛にあらゆる方面に亙つて透徹明快なる名論卓説を發表せられて、常に學界に清新の氣を注入せらるゝ博士の御精進は、我々の崇敬措く能はざるところであるが、今回博士は又従來地學雜誌・地球等に於て發表せられたる戰爭に關する論文を一部の書に纏めて學界に贈られた。時局下我々の喜びこれに過ぐるものはない。本書の内容は、

第一篇 戦争地理學の内容と分科

一、戦争の地理的意義及びその研究

二、黄河下流平地の戰略地理的意義

三、再び戦場としての支那の地勢に就いて

第二篇 戰略地理學概説

第三篇 戦争の歴史地理學的考察(上)

第四篇 戦争の歴史地理學的考察(中)

第五篇 戦争の歴史地理學的考察(下)

一、戦争の歴史地理學的考察

二、昭和十年の回顧と十一年の展望

三、太平洋上に於ける日本帝國の地位

第六篇 最近北支那に於ける戦争の地理學的考察

一、北支那黃土地域に於ける戦争の地形的考察

二、戦争に反映する支那の地理的特色に就いて

三、北支那大平野の諸戦場とその地名の意義及び

讀み方

の六篇より成り、何れの篇、何れの頁を見ても必讀の文字に充されてゐるが、元來本書は多くの論文を集められたものであつて、その内容は多岐に亙り、限られた紙面に各篇の内容を詳細に紹介することは不可能なことである。よつて今試に第一篇の「黄河下流平地の戰略地理的意義」について見るに、北支那の大平野は東亞地域の中心になつて居り、その周邊の地理上の關係を見るに、この大平野は凡そ南北に延びた等脚三角形をなし天津・北京はその頂角をしめ、屈曲した揚子江はその底邊を成し、荊州・漢口附近と南京・鎮口・上海附近はその兩端の底角に當つて居り、而して京漢鐵道と大連河及び津浦鐵道線とはその兩脚邊をなして居るとして巧にこの大平野の大勢を説明されついで「大平野の西側は山嶽が大廣間の障壁を造つて、處々に

入口を開けてゐる。汾水溪谷を占めた山西省、洛水溪谷の洛陽等は其奥の小座敷で、陝西省渭水溪谷の西安平野は廣い奥座敷として最も重要で、又長い揚子江廊下の奥にある四川省成都平野は奥まつた別室である。北京は上段の床間に當つて居るが、是から東北には山海關の杉戸を開けば棧側傳ひに廣い否な廣ろ過ぎる所の遼河及び松花江溪谷の大廣闊たる滿洲に通じ、又西には居庸關の出入口から宣化府の小房を通つて更に廣漠たる蒙古の曠野に通ずるので、此の北京の背面は甚だ物騒で、契丹・女眞・蒙古・滿洲等の民族は此の出入口を破つた強盜が居直つて四百餘州の主人公となつた形である。」とその四周との關係を説明される。ついで戰國時代に於ける黄河々道を當時の史實を

根據として明快に説明せられ、北京・開封・南陽・襄陽・武漢三鎮等の軍事的要地を歴史に基いて餘蘊なき迄に論ぜられてゐるが、例へば襄陽について「襄陽の荊豫に跨り連り南北を控制する戰略地理上の意義は三國鼎立の時代に特に活躍して現はれて居る。蜀が之を持てば北に魏を脅かし、東に吳を脅かすことが出来るし、魏が持てば蜀を西方に封鎖して、吳を攻めることが出来る。關羽が襄陽に於て曹仁を樊城に攻め于禁を擒にした時に、威華夏に震ひ曹操が許都から都を遷さんと議した。關羽が吳の呂蒙の詭計に陥つて、腹背から襲撃されて戰死するに及んで、蜀は全く出口を失つて、孔明の智も陝西に出て西安を攻

め、魏の背面を衝く以外に施すべき策がなくなつて又た中原に争ふことが出来なくなつた。吳も亦た魏に襄陽を渡して後は洛陽、開封の間に出て戦ふことが出来なくなつて、晉の羊祜、杜預相繼いで此を鎮して、吳を滅す策源地となした。三國の形勢は實に魏の襄陽占領によつて決定したといふも過言でなかつた。」と説き、ついで蒙古軍の襄陽攻撃を論ぜらる。説き去り説き來つて、沈滞するところなく、一篇を終るまで我々を惹きつけずには置かない。

第二篇戰略地理學概説は戰爭と地理との關係を論ぜられたもの、廣く歐洲・支那・日本の戰史に據つて地形と戰爭との關係を論ぜられ、この方面の文獻に乏しい我が國に於て特にその價值が大きく、第三篇・第四篇・第五篇は地域を我が奥羽・關東・中部にとつて、古今の戰史に基いて仔細に要所々々の戰略的意義を検討されたものであるが、就中甲府盆地を戰略的根據地とする武田氏の四方八方への進出を甲陽軍鑑等の文獻によつても詳細に論じてゐるが、その研究方法は博士獨特のものといふべく、興味津々たるものがある。第五篇は博士最近の執筆になるものであつて、我が同胞が如何なる地理的條件の下にあつて奮戦せられつゝあるかを明らかにせられたものであつて、時局下絶好の讀物である。

思ふに博士の學識は東西を兼ね、支那の地理、日本の地理を

説明さるゝに當つても、常に歐洲のそれに比較せられ、又廣く世界の戰史に據つて説明を施こされる。而もそれは一々根本的史料に據られて居り、その研究は徹底的であり、判斷は明快にして鐵則の如く、我々の視野は一層の廣みを加へられる。我々の大いに學ぶべき點である。

凡そ支那の文獻は最も豊富にして而もその記述の方法は多く非科學的である。されば複雑多岐なる支那の文獻を整理し、之を系統立てんがためには一の標準を立つるにあらずんば、文獻に拘束されて支離滅裂となる危険性が多いのであるが、その標準として地理を用ふることが、一つの有効なる方法であることは博士のこの書に最もよく示されてゐる。嘗て滿鮮歴史地理研究報告が斯界の最高權威として世に送られたころ、この地理的方面の研究に主力が注がれた様であるが、その後はその反動として地理的方面のことが不當に輕視されてゐる傾向がないでもない。言ふまでもなく地理の研究も單なる地名の考證とか、地理書の文獻學的研究に終つてはならないが、この書に於て模範的に示されたるが如き方法によつて、地理に即して歴史を考へるならば、歴史の理解と整理にどれだけ役立つか解らない。この意味に於て博士も第一に推薦せらるゝところの讀史方輿紀要の如き先人の尊き業績はもつと利用されて然るべきであらう。

今や大陸の經營は着々として進行しつゝあり、我が國人の關心は大陸に集注されてゐる。今こそ東洋史の學徒はその研究を現實と結びつけ、東亞新秩序形成の礎石ともなすべき秋である。而してその現實との結合の地盤として地理をもつことが最も有効適切なる方法であらう。それにつけても、博士が「日本の學者で多少漢文の素養のあるものにも支那の材料を科學的に使ひこなし得ない理由がある。それは我々の學んだ所の漢文の教科書たる經史子集の四部共に之を教へる學者すらその文句に含まれた現實的意義を解釋し得ぬ所が多く、唯だ文字の解釋だけで既に一生を費すに足り、活眼を開いて活書を讀む方針を學生に吹き込み得ない。従つて現在の高等教育を受けた科學者に指を鼎に染めしめる様に導き得ないのも敢て怪しむに足らぬ。」と警告されたことは我々のとくと服膺すべきところであらう。限られた紙數の中にこの内容豊富な書を紹介せんとして筆及ばず、紹介の宜しきを得なかつたことを恐れつゝ、東洋史を學ぶ者に限らず、廣く一般人士に必讀の讀物としてこの書を推薦するものである。

(北山康夫)

蹇袒漂流記の研究

園田 一 龜 著

康德六年七月二十五日南滿洲鐵道株式會社鐵道
總局庶務課發行、菊判三二八頁、圖版一四葉

著者園田氏は多年蹇袒漂流記を研究され、その成果は既に奉